

[論文]

多磨全生園における詩サークルの活動と歴史的意義 —詩誌『猿』『灯泥』『石器』を中心として—

木村 哲也（国立ハンセン病資料館）

はじめに

本稿は、ハンセン病文学史の研究のなかで取り上げられる機会が少なかった、多磨全生園における詩サークルの活動をたどり、その歴史的意義を、主に戦後のサークル誌『猿』『灯泥』『石器』の分析を通して明らかにするものである。

多磨全生園（全生病院を含む）のハンセン病文学というと、北條民雄が著名であるが、それのみが取り上げられる現状があり、いきおい、他の書き手たちの研究がおざなりにされる傾向がつづいている⁽¹⁾。

実際には、戦後に限っても、全生文芸協会による創作（小説）・詩・児童詩などの合同作品集『癪者の魂』（1950年）が出版されている⁽²⁾。小説の分野では、冬敏之、国満静志、水上恵介らが単行本を上梓している⁽³⁾。多磨全生園俳句会⁽⁴⁾、武藏野短歌会⁽⁵⁾が合同作品集を刊行するだけの活動を行っていることも無視できない。園誌『山桜』『多磨』には、毎号文芸作品の投稿が見られる。しかし、それらを論じた研究はほとんど見られないのが現状である⁽⁶⁾。

本稿では、多磨全生園で発行された戦後の詩のサークル誌『猿』（創刊号、1951年3月～第3号、発行年月不詳）、『灯泥』（創刊号、1950年12月～

第15号、1953年2月）、『石器』（創刊号、1953年10月～第6号、1956年3月）を取り上げる。

その理由は、文芸関係のサークルのなかで詩のサークルだけが、多磨全生園という単一の療養所の枠を超えて全国組織として成長し、全国に散在していた詩の書き手が一堂に集う場を創出して活動を行った。さらに詩運動の担い手たちの主要な幾人かは、単に文学の領域にとどまらず、自治会活動や後の国家賠償請求訴訟のリーダーとして、その活動は社会的広がりを持ち、ハンセン病問題の解決にも寄与した。それら多磨全生園の詩サークルの歴史的意義を、ハンセン病問題の歴史のなかに位置づけることを本稿の課題とする。

黎明期の詩話会活動

（1926年～1946年）

全生病院における詩の活動は、園誌『山桜』創刊直後の第2号（1919年6月）から個人による投稿が見られる。グループとしての活動は、1926年に広畑隣助という職員が園芸技手として病院の農園の指導員として赴任した時に始まる⁽⁷⁾。筆名を広畑渓鶯といい、文学同好者だったので、院内の同志を集めて詩グループをつくった。メンバーは井上鶴夫を中心に、小林三郎、内田静生、平鍋狂

(1) 拙稿「大江満雄とハンセン病者—交流の軌跡」（『歴史民俗資料学研究』第3号、1998年2月）193-205頁では、本稿にも登場する国本衛（国本昭夫）や舒雄二ら関係者の聞き取りを紹介しているが、サークル誌『灯泥』『石器』については誌名の紹介にとどまり、内容分析までは行っていない。荒井裕樹『隔離の文学—ハンセン病療養所の自己表現史』（書肆アルス、2011年）は、第9章「療養文芸」の季節—〈弱さ〉の自画像（267-298頁）で、患者運動と文芸との関係に関する考察があるが、本稿で扱う『猿』『灯泥』『石器』については、注で誌名に触れるにとどまっている。江連恭弘「一九五〇年代におけるハンセン病生年患者の自己表現と療養意識」（君島和彦編『近代の日本と朝鮮—「された側」からの視座—』東京堂出版、2014年）243-270頁は、戦後「青年患者」たちが文芸と共に患者運動の担い手となることに注目し、戦前から続く「慰安」のための文学と「文学的決別」を試み、「劣等感」「卑屈感」の克服を課題として新たな可能性を模索していく様相を、『灯泥』『石器』に作品を寄せた厚木觀（光岡良二）、国本衛（昭夫）、舒雄二らの言説にも注目して論じている。以上の先行研究をふまえて、本稿ではさらに具体的な分析を行う。

(2) 全生文芸協会編『癪者の魂』（白鳳書院、1950年）。

(3) 冬敏之『埋もれる日々』（東邦出版社、1970年）、『風花』（東邦出版社、1977年）、国満静志『漂泊の日に』（皓星社、1988年）、水上恵介『オリオンの哀しみ』（水上恵介遺稿集出版委員会、1995年）。

(4) 多磨全生園俳句会『芽生』（近藤書店、1957年）。

(5) 武藏野短歌会『曼珠沙華』（長崎書店、1934年）、『木がくれの実』（岩波書店、1953年）、『輪唱』（白塔書房、1959年）。

(6) 水上恵介については、清原工「オリオンの哀しみ」戦時下のハンセン病療養所」（『ノーマライゼーション』第25巻第8号、2005年8月）38-41頁。冬敏之については、鶴岡征雄『驚手の指 評伝冬敏之』（本の泉社、2014年）がある。

(7) 多磨全生園患者自治会編『俱会一処—患者が綴る全生園の七十年』（一光社、1979年）76頁。広畑隣助については、『竜胆—広畑隣助師遺稿』（全生病院『山桜』出版部、1931年）。

濤、その他数名であった。数年後に杜芙蓉子、山本田木男、大津哲緒、樺木吹夫らが加わって、後の詩話会の基礎を築いた⁽⁸⁾。

当時の環境は文学活動を行うということ自体が容易ではなかった。当時のハンセン病療養所は浮浪している患者を収容すべく設けられた施設であったため、「病院は浮浪患者の溜り場の観を呈した。大ボス小ボスが入り乱れ、文学などを志ざす者は陰に陽に迫害された」という⁽⁹⁾。自宅収容者（浮浪患者と区別されて呼ばれた）が詩を綴り、日記を書いただけで、「“新患者のくせに生意気な奴だ”と鉄拳の制裁を加えられた」という逸話も残っている⁽¹⁰⁾。

後年、詩運動のリーダーとなった国本昭夫（国本衛）は、当時の詩人たちの作品の特徴を、「表現法は硬く、古く、明治調のものが多かつた」。「その表現形式はほとんど文語体で書かれている」。「この時期は、どの人達にも深刻な心境や悲惨な現実を歌つたもの、自嘲的なもの、宿命を呪つたものなどがある。希望的なもの、先の明るいもの、ロマンチックなもの、幻想的なものは皆無だつた」と指摘している⁽¹¹⁾。

1931年11月14日、女流詩人・生田花世（生田春月の夫人）が随行15名と共に来院したことが、後に詩話会を大きく前進し発展させる要因となつた。一行の中には詩人の佐藤信重も加わっていたからである。佐藤は1932年9月から『山桜』に断続的に詩の選評を開始し、1944年7月までつづける⁽¹²⁾。

全生詩話会の正確な結成年の記録は残っていないのだが、全生詩話会編と銘打たれた最初の合同詩集『野の家族』（全生病院患者慰安会）が上梓されたのは1935年4月である。題字・生田花世、序文・佐藤信重、同・林芳信、後書・内田静生。

収録詩人は、甘露寺和郎、山本田木男、杜芙蓉子、金森契月、東條環（耿一）、平鍋狂濤、覓雄児、小内杏、山本一石、川島かなめ、小林左武呂、後藤曉風、早川兎月、杉村透村、蘭柘樹司、麓花冷、大津哲緒、内田静生の18人であった。

1930年代の『山桜』に掲載される作品のジャンルは詩だけでなく、童謡、民謡、小曲と、多彩なものとなり、詩話会の活動が軌道に乗つたことがうかがえる。

当時の詩話会の活動については、「以前のように己の宿命だけの詠嘆の歌から、自然への対話性を持つた詩や、宇宙観を持つた詩が作られた。佐藤信重のねばり強い指導力と情熱に負うところが大きかつた」との評価がなされている⁽¹³⁾。

しかし、太平洋戦争期の療養所は、入所者の生存そのものをおびやかす環境を強いることとなる。1940年に杜芙蓉子が亡くなり、1942年には詩話会の中心人物であった東條耿一、河野和人（前名・覓雄児）が夭折。同年、光岡良二が退園（戦後、再入所）。さらに大津哲緒、樺木吹夫が自治会執行委員に推挙され、多忙により詩話会から離れる。その後、戦況の悪化とともに、大部分のメンバーが死亡し、黎明期からの生存者は内田静生一人となつた⁽¹⁴⁾。

ただし、新たな詩の書き手も現れている。1930年代後半以降、伊東秋雄（伊藤秋雄）、島憂児（盾木汎）、石川清澄、沼尾みのる（船城稔美）らが『山桜』誌上で詩を書きはじめている。彼らの活動が、戦後の布石ともなつた。

しかし戦況の悪化による体力減退、物資不足から詩人たちは発表の場を失い、草創期からのただ一人の生き残りであった内田静生が1946年3月に亡くなつた。これにより詩話会は自然消滅となる⁽¹⁵⁾。

(8) 以下、戦前の詩話会の動向については、杜美太郎「詩話会誕生」（『多磨』第40巻第10号、1959年11月）82-88頁を参考とした。杜美太郎は国本昭夫（国本衛）と同一人物。

(9) 前掲、杜美太郎「詩話会誕生」82頁。

(10) 同前、83頁。

(11) 同前、84-85頁。

(12) 『山桜』『多磨』の歴代の詩の選者は、佐藤信重（1932年9月-1944年7月）、神保光太郎（1948年11月-1952年12月）、藤原定（1953年12月-1956年12月）、三好豊一郎（1956年7月-1968年2月）である。

(13) 前掲、杜美太郎「詩話会誕生」86頁。

(14) 同前、87頁。

(15) 同前、88頁。

戦後の多磨文芸協会会长をつとめた厚木叡（光岡良二）は、こうした経緯もふまえてのことであろう、多磨の詩話会の特徴を次のように指摘している。

「先ず第一に気づくことは、戦後の多磨詩壇が、戦前のそれと共に通するものをほとんどもたず、この二つの詩活動の間には、伝統の継承でなく、はつきりした断絶があるということである」⁽¹⁶⁾。

戦前の詩話会活動は、戦後のそれとほぼ断絶した点に特徴がみられることを確認しておきたい。

新旧世代の相克

全生詩話会が再発足したのは、園内が戦争の混乱からようやく落ち着きを取り戻した1948年～1949のことである⁽¹⁷⁾。

時代背景として重要なのは、戦後民主主義と初の化学療法の新薬・プロミンの登場であろう。光岡良二（厚木叡）は、1949年に入るとプロミン治療を主題とした短歌が多くなることを指摘し、「敗戦は患者を絶対主義の権力から精神的に解放し、プロミンは肉体的に病気の重圧から解放した。この二つの解放の上に患者と療養所の「戦後」が拓かれてゆくのである」と述べている⁽¹⁸⁾。

戦後の全生詩話会の結成会に集った顔ぶれは、厚木叡（光岡良二）、伊藤秋雄（伊東秋雄）、盾木氾（島憂児）、村瀬鉄二郎、石川清澄、船城稔美、水上恵介、以上戦前派に対し、戦後派の右川斗志、白浜博、国本昭夫などである⁽¹⁹⁾。

1948年11月に『山桜』は戦後初めて文芸特集号を出し、神保光太郎が詩の選を担当した。1950年5月から神保光太郎は正式に毎月の『山桜』の詩の選者となり1952年12月までつとめている。神保の最初の選により、一位、二位に選ばれた厚木叡「伝説」と盾木氾「主語」は、以下のような作品であった。

「伝説」 厚木叡

ふかぶかと繁つた樅の森の奥に
いつの日からか不思議な村があつた。
見知らぬ刺をその身に宿した人々が棲んでいた。
その顔は醜く、その心は優しかつた。
刺からは薔薇が咲き、その薔薇は死の匂ひがした。

人々は土を耕し、家を葺き、麺麯を焼いた。
琴を奏で、宴に招き、愛し合つた。
こそ泥ぐらいはありもしたが
殺人も 犀通も 売笑もなかつた。
女達の乳房は小さく、ふくまする子はいなかつた。

百年に一人ほどわれを縊れる者があつたが
人々は首かしげ、やがて大声に笑ひ出した。
急いで葬りの穴を掘り、少しだけ涙をこぼした。
狂つたその頭蓋だけは、森の獣の喰むに委せた。
いつもする勇者の盾には載せられなんだ。

戦ひはもはやなく、石弓とる手は萎えていた。
ただ ひそかな刺の疼きに 人知れず呻き臥すと
き、
おや 祖たちの猛々しい魂が帰つて来て、その頬を赤く
染めた。
宵ごとに蜜柑色に灯つた窓から、うめきと祈りの
変らぬ儀式が
香爐のやうに星々の空に立ち昇つた。

幾百年か日がめぐり、人々は死に絶えた。
最後のひとりは褐いろの獅面神になつた。
くつ 頬れた家々にはきづたが蔽ひ
彼等の植ゑた花々が壮麗な森をなした。
主のいない家畜らがその蔭に跳ね廻つた。

タベタベの 雲が
獅面神の双の眼を七宝色に染めた。

(16) 厚木叡「多磨詩壇の戦後十年」（『多磨』第36巻第9号、1955年9月）54頁。

(17) 戦後の全生詩話会の再発足年は、1948年暮れ（前掲、厚木叡「多磨詩壇の戦後十年」55頁）、1949年初頭（前掲、多磨全生園患者自治会編『俱会一処』195頁）、1949年冬（前掲、杜美太郎「詩話会誕生」88頁）と、資料によってまちまちであり、正確な年は定かでない。

(18) 光岡良二（厚木叡）「書誌・『多磨』五十年史 連載第30回」（『多磨』第55巻第6号、1974年6月）32頁。

(19) 前掲、杜美太郎「詩話会誕生」88頁。

「主語」 盾木汎

れぶらだけが俺たちの天地
どうして
美しい詩などが生れるだらう

春の花も 風に散る柳の緑も
青葉の光りも 時鳥の音も
それはれぶらの助詞にすぎない

天恵と 天刑は
れぶらの形容詞
宿命と 悲惨は永遠の副詞

山は暮れ 野の黄昏は
れぶらの動詞
一葉落ちるのもその類だらう

自暴自棄と自殺は接続詞
信頼と敬虔も同様だ
天国と 地獄はそれに続く

新薬出現 全治癒は未然形
咽喉切開が終止形
これらの活用はみんな暗い

だがたつたひとつ
地にしがみつき根を張つて
生きてゆくいのちしづかなる感動詞がある

こんな俺たちの主語 れぶらに
天地のどんなしめりがどうして
美しい詩をうたはせやう

神保光太郎は、これらの作品を次のように評している。
「一位の厚木さんの作品は二篇共に、すぐれた

ものでしたが、「伝説」の方を採りました。かうした病にとりつかれた心境を、このやうな新鮮で浪漫の物語に造型されたこの作者の天分に讃歎します。二位の盾木さんの「主語」は作品を貫く虚無と諦観の思索が新しい感覚に依てとらへられてゐると思〔い〕ます。おもしろい作品だと思ふます」⁽²⁰⁾。

厚木叡の「伝説」は、のちに『日本詩人全集 第11巻 戦後百人集』(創元社、1953年) や真壁仁編『詩にめざめる日本』(岩波書店、1966年) に採録されるなど、優れた現代詩として評価を受けることとなる。

厚木叡は後年これらの詩を振り返り、その画期性を以下のように述べている。

「(「伝説」と「主語」は) 多磨詩に一つのエポックを刻みつけるものとなつた。この両詩のもつ乾いた、冷やかな抒情、知的な構成は、従来の多磨詩にみない質のものであり、今まで抱かれていた詩概念を搖すぶり、変革を強いる一つのショックとなつた」⁽²¹⁾。

戦前の詩人たちの詩風が、「あくまで非社会的な、個人内省的な詠嘆と抒情であり、生理的な悲惨とその情緒への永劫回帰であつた」⁽²²⁾のと比べて、その変化は目覚ましいものがあったであろう。

全生詩話会は、伊東秋雄(伊藤秋雄)を会長として、サークル誌『摸』を1951年3月に創刊するが、第3号まで出して廃刊になっている⁽²³⁾。ただし『摸』が廃刊とっても、全生詩話会のメンバーは園誌『多磨』誌上で詩の発表はつづけている。

いっぽうで、国本昭夫、右川斗思らを中心とする若い世代の詩人たちが、全生詩話会から訣別して、彼らだけのグループ「灯泥会」をつくり、1950年12月、詩誌『灯泥』を創刊する。『灯泥』は2年余りつづき、第15集(1953年2月25日)まで出す活動をつづけた(後述するように発展的解消をし、全国組織の詩誌『石器』創刊につながる)。

『摸』と『灯泥』の創刊号への参加者の年齢を

(20) 神保光太郎「詩を選んで」(『山桜』第29巻第9号、1948年11月) 17頁。

(21) 前掲、厚木叡「多磨詩壇の戦後十年」55頁。

(22) 同前、54頁。

(23) 同前、57頁。ただし、国立ハンセン病資料館で所蔵するのは創刊号(1951年3月15日)と第2号(1951年5月15日)のみ。第3号は現時点で確認できない。

比較してみると、以下のような結果となった⁽²⁴⁾。
比較のため、仮に1950年時点での年齢を記す。

『摸』創刊号執筆者（掲載順）

厚木叡（光岡良二） 1911年生まれ。39歳。
北川光一 1919年生まれ。31歳。
伊島三吉 不詳。
宇津木豊 1911年生まれ。39歳。
盾木弘 1917年生まれ。33歳。
中秋賢治 不詳。
伊東秋雄 1913年生まれ。37歳。
田所靖二 1919年生まれ。31歳。
芳賀令吉 不詳。
館祐子 1933年生まれ。17歳。
石川清澄 1912年生まれ。38歳。
阿部芳春 不詳。
水上恵介 1923年生まれ。27歳。

『灯泥』創刊号執筆者（掲載順）

狩雄二 1932年生まれ。18歳。
右川斗思 1924年生まれ。26歳。
奥隆治（奥二郎） 1930年生まれ。20歳。
白浜博史 1928年生まれ。22歳。
船城稔美 1924年生まれ。26歳。
国本昭夫（国本衛） 1926年生まれ。24歳。

両者とも10代～30代の若い世代の書き手であるが、『摸』は30代中心、『灯泥』は20代中心のメンバーであることが明瞭である。『灯泥』主宰者の国本昭夫自身も、『摸』同人を「戦前派」、『灯泥』同人を「戦後派」と称して区別している⁽²⁵⁾。

『灯泥』に集った詩人たちは、旧世代に対してどのような問題意識を提起していたのであろうか。掲載されたのは、次のような作品であった。

「瞳孔の恋人」 国本昭夫（創刊号）

人間が地球の端を行く
狂つた時計をさげ

赤い帆を上げて
眼だけがきざつぼく
黄昏の色彩に
恋の橋をかける。

虚構の空に
汝が靈魂は
漂々としてあてもない
又しても新らしい病氣は^{やまい}
画面一ぱいに
夜の白描をなした。

——うすはげた彫刻のかげに
太陽はめぐり
海はねむつている
瞳孔の恋人は
詩人であらぬ詩人の如く
私の胸に楚々とねむつていた。

詩の巧拙は問わないでおく。生硬で感覚的な表現をいとわずに、このように真っ直ぐにうたうことが、『灯泥』に集った戦後の若い世代の詩の特徴であった。

この詩の作者の国本は、創刊号の編集後記で、「我々は自己を見究めよう。そして前進しよう。貧しかつた過去を捨て、詩精神を研ぎあげよう。才知にまかせた手細工、気どり屋、ハツタリ屋[は]『灯泥』には絶対に許されぬ事だ。我らは最も意志が強く、全く新らしい意慾に燃えた者ばかりの『灯泥』である。勇敢であつて、冷静であり、そして純粹でありたい」と記している⁽²⁶⁾。

名指しこそしていないが、ひと世代上の詩話会メンバーの作風が、「才知にまかせた手細工、気どり屋、ハツタリ屋」と映っていたのであろうか。自分たち若い世代だけが集う『灯泥』という発表の場をつくり、「勇敢」「冷静」「純粹」であることが目指されたのであった。

『灯泥』掲載の作品を通覧して気づくのは、この若い詩人たちが、ハンセン病を直接の主題とし

(24) 「著者紹介」（『ハンセン病文学全集 第6巻 詩一』皓星社、2003年）472-488頁を参考とした。

(25) 前掲、杜美太郎「詩話会誕生」88頁。

(26) 国本昭夫「編集後記」（『灯泥』創刊号、1950年12月）26頁。

た作品をほとんど書いていないことである。おそらく、ハンセン病文学のレッテルを貼って見られることを、意図的に避け、文学作品そのものとして評価されるものを目指した結果だと推測される（後述する）。

そんな中にあって、病気を患った自己を、「病犬」に投影したと思われる次のような作品もある。しかし、これとて、ハンセン病そのものを主題とした詩というよりは、病犬への共感や思いやりの色が濃い。

「病犬」　　嶽雄二（創刊号）

夕焼けは燃え果てたが
未だ星達が生まれてゐない空
おの仄暗い淀みに
雲が鼠になりすまして
悠々と夜を待つ
夜を待つてゐる——

病犬は漁るものも無く
疲労ばかりを思〔い〕つきり背負つてゐた
これで三日
ひもじくて
わびしくて
今はつくねんと凍地にうずくまれば
雑木の葉が
痛ましく脱け落ちて疎らな毛並に一瞬
張り付いて
又、舞い立つて行つた

病犬は空を仰いだ
病犬は何か叫びたかつた
ただ一声吠えてみたかつた
だが その力も絶えてゐた
病犬は再びうなだれた
そして死んだ

やがて星がまたたき
月がのぼる
「今夜は好い月だ」

——カラカラ雨戸を繰り出す音
もう風も凧いでいた

次の「無精卵」という詩は、ハンセン病を主題に書かれていることは一読しても判別できない。しかし読む者が読めば、ハンセン病療養所で行われていた断種・墮胎を背景に持つ作品であることは明らかであろう。子どもを持つことが許されなかつた無念の心情を詩に託している。作者の船城はこの時、26歳～27歳であったはずである。そのようなまだ若い療養者が断種への無念の思いを詩作品に形象化して訴える場として『灯泥』は存在していたのである。

「無精卵」　　船城稔美（第8集、1951年7月）

この 谷間の村に
光りはあまり とゞかない
バラ色の太陽は
かぐるゝ天空の片隅に
ひつかつてゐる。
ひとすじの明りが
ときたま、そゝいでくる
すると村人は、おづおづ…
かすかに、はにかむ。

谷間の住人は
みんな無精卵—
無精卵の哀しみが
夜々の営みをはげしくさせる
そのことが永劫の暗に
一直線を引いてゐるのだが?
孵化することのない営みに
どうしようもない反抗が
狂ほしく噛みついてゆく
ひよつと、孵化するのじやないか
このわづかなよもやは
もう村人の悲願になつてゐる。

やがて…
時の輪廻が谷間の村を
埋めつくす

無精卵への反抗も
はげしかつた夜々の営みも
長い絵巻物の一頁になり
時の風化作用の中へ
没してゆくのだろう。

療養所内の出来事だけでなく、社会的な出来事をテーマにした作品が登場することも、戦後の詩の特徴として挙げられる。それは、国内の政治的事件だけでなく、国際的なニュースにも及んでいる。次の作品は、「朝鮮動乱ニュース映画」と併し書きが付された作品で、同時代の朝鮮戦争で両親を失った幼な児を主題にしている。

「幼な児」　右川斗思（第5集、1951年4月）

家は焼かれました
父は軍隊に奪られました
私はチゲに乗せられて
母と二人で逃げたのです
はじめはまはりに大勢ゐましたが
すんすんおひ越されたのです
母はあえぎあえぎ歩きました
綿のはみでたヂヨグリに汗が沁み
肩から下の方へ
黝く染つてゆくのがよくわかりました
よろめくたびにチゲがゆれ
それにとても腹が空いたので
泣きました
ないともないても母はとまりません
やつとチゲをおろし
シツキに山盛り栗飯をもつてくれました
夢中で喰ひました
気付いたら母がゐないです
いくら呼んでも居ません
いくら泣いても来ません

画面いつぱい
真裸の幼な児が足をなげだし
顔をくちやくちやにしかめ

ひきつけたやうに泣いてゐる
ひとつこひとりゐない赫土の道端に
投げだされた赤胴あかがねのシツキが
つめたい陽ざしに映え
遠く禿山の嶺々に
思ひ出したやうに砲声がとどろく。

（朝鮮動乱ニュース映画）

以上のように『灯泥』の作品群を通覧すると、若い世代が、旧世代に対抗して清新な表現を追究したこと。ハンセン病そのものを明示した作品は影を潜めていること。社会問題へと視野を拡大した作品も見られることなどが指摘できる。

『模』の中心的詩人であった厚木叡は、彼ら『灯泥』同人たちに対して、後年、次のような評価を与えている。

「『灯泥』のムーヴメントは、大きく評価されてよい。それは療園の戦後の二十代詩人が必然に経なければならなかつたレジスタンスと自己陶冶の形態としてみられる。未成熟な精神と病んだ肉体をもち、特殊な封建的な後進性を負わされた療園小社会の中でその青春の自由さを異様に圧えられ歪められて生きることを強いられた彼ら、しかもそのような状況の中で戦後のアーティスティズム（審美主義）はあまりにもどかしい生ぬるさに思えた。彼らにとつては詩とはもつと直接的なもの、もつと熱っぽい生の断片であり、叫びであり、彼等の精神と肉体のすべてを叩き込まねばならぬ溶炉であつた」⁽²⁷⁾。

全生詩話会のひと世代上の詩人たちに対して、20代の詩人グループが集った『灯泥』の清新さがある種のインパクトを与えたことをうかがうことができる証言となっている。

当時、『模』『灯泥』両グループと分け隔てなく交流をもつた詩人の大江満雄は、『模』の厚木叡らに対して、「国本君らの詩誌と合同できない事

(27) 前掲、厚木叡「多磨詩壇の戦後十年」56頁。

情あるのでしょうか」と、詩のグループが二派に分かれたことを気遣う手紙を書き送っている⁽²⁸⁾。

しかし両者の分裂は、関係の悪化を見るよりもむしろ、独自の詩の発表の場を自ら確保し、互いを意識し合いながら、ともに切磋琢磨しながら、活動を盛り上げていく関係にあったと見るほうが妥当であろう。

『模』廃刊後は、同グループの中心人物であった厚木叡が『灯泥』へと第13号（1952年9月）から参加し、同第14号（1952年11月）からは、田所靖二、石川清澄、館祐子らが次々と合流している。詩サークルが二派に分裂する事態は、全生詩話会本流の『模』グループが早々に解体し、新興勢力の『灯泥』グループへと合流する経過をたどったのである⁽²⁹⁾。

北條文学へのアンチテーゼ

『模』『灯泥』両グループは、担い手の世代こそ違うものの、共通した問題意識も見られる。旧来のハンセン病文学に対する対決姿勢である。

『灯泥』創刊号に、国本昭夫は「二十代の苦悩」なる一文を寄せている。新たな世代による文学運動を起こそうとするマニフェストである。

「僕達は最早既成のライ文学なるものをも抹殺しなくてはならぬ時を、時間的にも判然と知る。／醜〔く〕も悪に充ちた觀念的傾向のライ文学を築きあげた過去。それを現在まで守りぬこうとする人間。それを歌はなかつたら事すまぬ人間。それらの俗臭的雰囲気から二十代は起ち叫ばなければならぬ。全く新らしいエスプリと意慾とによつて、病者の精神状態から遠く離れ、人間としての芸術を生む事を僕達は信じてゐる」⁽³⁰⁾。

国本によれば「既成のライ文学」は、「病者の精神状態」に蝕まれており、それを「抹殺しなく

てはならぬ」とまで言う。そこからさらに「人間としての芸術を生む事」が目指されているのである。

前項で見たようにハンセン病を直接的な主題とした作品が少ないので、この国本の一文にあるような問題意識が、『灯泥』同人に共有されていた結果であることが理解できる。

じつは旧世代の厚木叡も同時期、全生文芸協会の作品集『癱者の魂』の跋文で、同様の趣旨で以下のように述べている。

「戦前文壇に彗星の如く出た癱文学のファースト・ランナア北條民雄君も嘗ては『山桜』印刷所で文選工として活字を拾つてゐたのです。／北條の作品のやや病的な誇張とフイクションは、彼の内的苦悩の象徴とし凄壯の美を放つものではあつても、その作品世界がそのまま癱院の現実であると思ひ誤られた面が無くもありません。眞実の癱園の姿、その光りと暗、癱者の魂と生活の全的な表現は、更に真卒で健康で強靭な文学の選手を俟たねばなりません。私どもの周囲の若い作家達の目指し苦闘してゐる處も正にそれであります」⁽³¹⁾。

厚木にはのちに光岡良二名義で書かれた『いのちの火影——北條民雄覚え書』（新潮社、1970年）という北條民雄の評伝もあるが、文学同好者として親交のあった北條の作品を「やや病的な誇張とフイクション」と断じ、「癱者の魂と生活の全的な表現」こそ、「私ども周囲の若い作家達の目指し苦闘してゐる處」であると提起しているのである。

戦前派の厚木によっても、戦後派の国本によつても、ともに目指されていたのが、旧来のハンセン病文学をいかに乗り越えるかという課題であったことがわかる⁽³²⁾。そこで多分に意識されていた

(28) 大江満雄「春箋抄」（『模』第2号、1951年5月）18頁。

(29) 前掲、江連恭弘「一九五〇年代におけるハンセン病生年患者の自己表現と療養意識」253頁では、『灯泥』終刊の理由として、全生詩話会から「所内公認文化団体の詩話会に対する分派活動」と批判されたことが挙げられているが、本稿で明らかにしたとおり、全生詩話会本流の『模』グループよりも、『灯泥』グループの優位が顕著である。

(30) 国本昭夫「二十代の苦悩」（『灯泥』創刊号、1950年12月）17頁。

(31) 厚木叡「跋」（前掲『癱者の魂』）264頁。

(32) 前掲、江連恭弘「一九五〇年代におけるハンセン病生年患者の自己表現と療養意識」264-265頁でも同様に、1950年代の文芸活動と患者運動の関係を、旧来の「劣等感」「卑屈感」克服への不斷の試みとして評価している。

のは、同じ多磨全生園（全生病院）の療友の北條民雄であった。

戦後、ハンセン病療養所の詩人たちと詩作を共にした詩人の大江満雄は、北條民雄が自らの作品を「癩文学」や「療養所文学」と呼ばれるのを嫌い、「私はただ人間を書きたい」と述べている有名な一節を引いて「純文学強調の意識がはたらいてると思う。屈辱感除去をいっているがライの恐怖、屈辱感を克服した文学だったろうか」と疑問を呈している⁽³³⁾。つづけて大江は本稿でも取り上げた盾木沢や狩雄二ら戦後の詩人たちの作品分析をおこない、彼らが病苦だけでなく「悪制度」とも格闘しながら詩作しているさまを目の当たりにしながら、彼らの文学に、北條文学には無かつた「新生面」を見ているのである。

全国組織「国立療養所詩人連盟」結成へ

『灯泥』は、先に述べたとおり、全生詩話会から別れた20代の若手を中心とする詩人集団であったが、このサークル誌は単に多磨全生園という一療養所のサークル詩誌であることを超えて、次第に全国の療養所から若い詩人が参加する場となつていったことも特筆される。

『灯泥』第8集（1951年7月）に初めて園外から、中石としお（大島青松園）が参加している。1927年生まれの中石は、この年、24歳であったはずである⁽³⁴⁾。彼は、『灯泥』参加と同時期の文章で、自らの詩作の態度を次のように述べている。

「療養所の多くの詩人は、病にとり囲れ、病のバッックにもたれて、不安、不信、孤独、絶望等をうたつているようだ。地に足を、しっかりとつけるということは大切であるが、それは狭い限定された殻の中に籠ることではない。かけがえのない苦悩や、不安の焦点を普遍性の中で捉え世界性の中に、そ、ぎ込まなければならない。僕らは、もう僕らのたゞ単なる溜息や、ヒカン論にはあきあき

した。お互に詩人であるなら現代の感情や、現代的思考につながるように、努力すべきだろう」⁽³⁵⁾。

ここでも、「不安、不信、孤独、絶望」という「狭い限定された殻の中に籠る」ような既存のハンセン病文学への批判意識は明瞭である。さらにそこから進んで、「普遍性」「世界性」「現代の感情や現代的思考」への「努力」が目指されているのである。多磨全生園という一療養所の一角で起こされた若い世代のムーブメントは、遠い地方の療養所の同世代の若い詩人の心をつかみ、同じ場への参加を促したのである。

『灯泥』創刊1周年の記念号となった第10集（1951年11月）では、既存の多磨全生園の同人以外に、全国からさらに多くの詩人たちが参加している（掲載順）。

鈴英一（駿河療養所）

志樹逸馬（長島愛生園）

河田正志（長島愛生園）

恵美かおる（大島青松園）

小島浩二（近藤宏一）（長島愛生園）

島内眞砂美（大島青松園）

中石としお（大島青松園）

おそらくこのあたりから、全国の療養所の詩人たちを組織する機運が高まる。そして『灯泥』は第15集（1953年2月）が最終号となり発展的に解消し、ついに全国組織の「国立療養所詩人連盟」が結成され、そのサークル詩誌『石器』の創刊号が出されるに至った（1953年10月）。

『灯泥』終刊から『石器』創刊に至る間の1953年4月、両者をつなぐうえで重要な詩集が出版されている。詩人・大江満雄が編集し、全国のハンセン病療養所の詩人たち73人が参加した合同詩集『いのちの芽』（三一書房）がそれである⁽³⁶⁾。編集にあたっては、各園を代表する編纂協力委員が置

(33) 大江満雄「ライ文学の新生面・恐怖・屈辱感からの脱出」（『新日本文学』第8巻第10号、1953年10月）90-96頁。

(34) 前掲、「著者紹介」（『ハンセン病文学全集 第6巻 詩一』）481頁。

(35) 中石としお「詩謡会便り」（『青松』第79号、1953年6月）25頁。

(36) 『いのちの芽』に至る以前にハンセン病療養所の詩運動を外側から支援する動きとして、詩人であり厚生省の職員でもある原田正二による詩誌『エオン』創刊（1952年7月）が挙げられる。全国の療養所の詩人たちが詩を発表する場となり、多磨全生園から厚木沢と国本照夫（昭夫）、長島愛生園から志樹逸馬と森春樹、菊池恵楓園から西場四郎（西羽四郎）、星塚敬愛園から北河内清が参加した。大江満雄も協力している。『いのちの芽』については、拙著『來者の群像一大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち』（編集室水平線、2017年）も参照。

かれた。委員の顔ぶれは、厚木叡・国本昭夫（多磨全生園）、斎雄二（栗生楽泉園）、志樹逸馬・森春樹（長島愛生園）、中石としお・恵美かおる（大島青松園）、重村一二（菊池恵楓園）、島比呂志（星塚敬愛園）であり⁽³⁷⁾、『灯泥』『石器』参加のメンバーと重なる。

『灯泥』から『石器』へと至る機運について、『いのちの芽』に編纂協力委員として参加した中石としおは、次のように述べている。

「全国療養所のうちで、熱心に詩と取組み、嘗々と研究を続けているのは何といつても全生園の『灯泥』同人の諸君であろう。政治的には勿論、さすが中央に近いだけあって、全生園に於ける文学熱は盛〔ん〕である。『灯泥』の国本君の、雑誌編集や詩に対する努力と情熱は特筆すべきものがあるが、今度彼等は、詩集〔『いのちの芽』のこと—引用者注〕出版を契機として、新しい運動を展開すべく準備を進めている。〔略〕彼等の新運動に賛意を示し、全国のエスプリ・ヌウボオの一人でも多くの参加を希みたい」⁽³⁸⁾。

全国の療養所の詩人たちが参加した『いのちの芽』が契機となって、新たな詩人たちの全国組織の結成へと展開しつつあることを証言する内容となっている。

この『灯泥』終刊号から『石器』創刊号に至る間、らい予防法公布（1953年8月15日）をめぐってハンセン病史上最大の人権闘争である「らい予防法闘争」が闘われていた。闘争を担った全患協の初代事務局長を務めたのは光岡良二（厚木叡）である（1952年12月～1954年3月）。そのようなさなかに並行して、これらの若手グループによっ

て新たな詩運動が起こされていたのである⁽³⁹⁾。

『石器』創刊号に掲載されている「国療詩人連盟会員名簿」は、以下のとおりである⁽⁴⁰⁾。

• 大島青松園	
中石としお	
山口忠夫	
上野青翠	
山沢芳	
島内眞砂美	
山本巖	
恵美かおる	
戸田次郎	
• 邑久光明園	
堂崎しげる	
中村七鶯	
うちだえすい	
• 長島愛生園	
志樹逸馬	
森春樹	
州間新吉	
河田正志	
• 星塚敬愛園	
島比呂志	
松田一夫	
北河内清	
月田まさし	
佐藤俊次	
• 栗生楽泉園	
福寿美津男	
• 東北新生園	
佐々木寒月	
• 多磨全生園	

(37) 大江満雄「詩集『いのちの芽』と予防法改正運動」（『愛生』第7巻第10号、1953年10月）17頁。なお、邑久光明園と神山復生病院からも『いのちの芽』への参加があるが、編纂協力委員は不明。

(38) 前掲、中石としお「詩説会便り」25頁。

(39) 前掲、江連恭弘「一九五〇年代におけるハンセン病生年患者の自己表現と療養意識」258頁では、『石器』が全国の療養所をまたぐ詩誌となつたのは、「これまでの『らい予防法』闘争を通じた全国的な患者運動の連帶の成果でもあった」と評価している。しかし本稿では、「らい予防法闘争」以前の『灯泥』時代からすでに療養所をまたいだ参加が見られたことに注目している。また、注(38)の中石としおの言葉にも見られるとおり、『いのちの芽』刊行準備の段階で形成された全国の療養所の詩人たちのネットワークが、『石器』の全国組織結成へと生かされた可能性を指摘しておきたい。

(40) 会員名簿を見て気づくことを何点か挙げておく。①これらの会員は、『いのちの芽』の参加者と大部分で一致している。『いのちの芽』刊行のムーブメントが、詩人たちの全国組織結成を促す一助となったことを裏付けている。②『灯泥』創刊時からの有力メンバーであり、『いのちの芽』にも参加している斎雄二が『石器』には一切の参加をしていないのは不思議である。斎は1951年に栗生楽泉園に転園しているが、転園先の園誌『高原』にはこの間も詩を発表しつづけているのである。③『いのちの芽』に参加している療養所の中で菊池恵楓園だけが『石器』に参加していないことも目立つ。どのような事情があったのであろうか。菊池恵楓園では独自の詩のサークル誌『炎樹』を『石器』終刊後の1956年4月に創刊する。

厚木叡（光岡良二）

石川清澄

生多純

奥二郎（奥隆治）

梶澄夫

北川光一

北原紀夫

国本昭夫（国本衛）

白浜浩

関道雄

多岐葉一

田所靖二

康一

盾木弘（盾木汎）

館祐子

船城稔美

冬敏之

岬治夫

深山裕子

『石器』創刊号では、厚木叡が「創刊の言葉」を、そして国本昭夫が「編集後記」を書いている。『猿』と『灯泥』の新旧世代が合流する象徴的な出来事であった。

厚木叡は、『石器』第3号（1954年1月）に「若さについて」というエッセイを寄せ、「『石器』多磨グループの仲間はほとんど僕より十代、二十代の年少だ。自分では知らないで、若さのもつ閃光のような美質を放散するのを見るのは快よい。[略] 存在の源泉からほとばしるような詩神は二十代にしか訪づれない」と若い世代にエールを送る一方で、「それ以後の年代のしごとは、その訪れの戦慄を、しづかに、強靭に成熟させるだけだ」と自ら年長者の役割もまた示している⁽⁴¹⁾。

このように、新旧世代、全国の療養所からのネットワークづくりを『石器』は成し遂げたところに、画期的な意義が認められよう。ハンセン病療養所

の文芸活動は、全国の各園で創作（小説）、俳句、短歌、川柳、詩などのジャンルごとにサークルが結成されているが、全国組織となったのは、詩のサークルのみである。『石器』は第6号（1956年3月）を出し、「後記」で終刊宣言がなされた。

各園の詩サークルへの継承

『石器』が終刊した1956年頃というのは、高度経済成長を控えて、多くの療養所で戦後に花開いた文化活動が、この時期を境に「低調」になってゆくことが指摘されている。

1950年代の文芸活動と患者運動の関係を分析した江連恭弘は、1953年の予防法闘争が「挫折」し、「らい予防法」が成立したこと、「劣等感」や「卑屈感」の根深さが顕在化し、以後、運動面では「隔離政策そのものを転換する運動」ではなく、「生活問題」へと重心を移行させていったと指摘している⁽⁴²⁾。

一連の変化を、当事者はどのように受け止めていたのであろうか。1955年の時点で厚木叡は、「残念にも詩の火の衰退は現在極点に達している感じがある」と、その変化を指摘している⁽⁴³⁾。

1957年、邑久光明園詩作会の代表・堂崎しげるも「『詩作会』に私はあいそがつきたと云う気持、無活動な状態をどうすることも出来ない無力」を述べている⁽⁴⁴⁾。

大島青松園の詩人・塔和子も、時期は多少下るが、1963年に「近年になって目立つ所内文芸熱低下現象」を指摘し、その要因として「テレビ等の普及による娯楽機関が豊富になった」こと、「軽症な患者なら、必ず治癒し退所出来る」ようになったことを挙げている⁽⁴⁵⁾。

しかし、こうした一般に言われる文芸活動の「退潮期」を経てもなお、各園で詩の活動は継続されていることを指摘しておきたい。戦後の全国各園の詩集刊行の動きをさしあたり1960年代までに限って挙げると以下のとおりである⁽⁴⁶⁾。

(41) 厚木叡「若さについて」（『石器』第3号、1954年1月）17頁。

(42) 前掲、江連恭弘「一九五〇年代におけるハンセン病生年患者の自己表現と療養意識」264頁。

(43) 前掲、厚木叡「多磨詩壇の戦後十年」58頁。

(44) 堂崎しげる「光明園の詩グループ活動に対する反省」（『楓』第20巻第8号、1957年8月）24頁。

(45) 塔和子「園内文芸のよどみ」（『青松』第185号、1963年1月）36頁。

(46) 駿河療養所、菊池恵楓園から『石器』への参加はないが、参考までに示す。松丘保養園からも『石器』への参加はないが、栗生楽泉園時代に参加していた福寿美津男（福島まさみ）が転園して『とっぱれ』に参加している。

- ・松丘保養園
合同詩集『とっぱれ』(1964年)
- ・東北新生園
合同詩集『樹水』(1961年)
- ・栗生樂泉園
合同詩集『草津の柵』(1959年)、衍雄二『鬼の顔』(1962年)、合同詩集『高原詩人集』(1962年)
- ・多磨全生園
『奥二郎詩集』(1958年)、杜美太郎(国本昭夫)『青春不在』(1959年)
- ・駿河療養所
サークル詩誌『雑草』(1965年創刊)
- ・邑久光明園
合同詩集『光の杖』(1954年)、同『こだま』(1955年)
- ・長島愛生園
合同詩集『白い波紋』(1957年)、サークル詩誌『裸形』(1958年創刊)、『志樹逸馬詩集』(1960年)、サークル詩誌『らい』(1964年創刊)、合同詩集『つくられた断層』(1968年)
- ・大島青松園
サークル詩誌『エチュード』(1950年創刊。1954年『内海詩人』と改称、1956年『海図』と再度改称)、合同詩集『花虎魚』(1956年)、塔和子『はだか木』(1961年)、同『分身』(1969年)
- ・菊池恵楓園
合同詩集『台風眼』(1955年)、サークル詩誌『炎樹』(1956年創刊)
- ・星塚敬愛園
サークル詩誌『星雲』(1947年創刊)、サークル文芸誌『火山地帯』(1958年創刊)、サークル詩誌『大隅詩人』(1959年創刊)、品川清(北河内清)『山鳥の径』(1968年)

このように、『石器』に集った全国の療養所の詩人たちは、各園の詩サークル活動の重要な担い

手として育ち、その活動は『石器』終刊後も各園で継承されていったのである⁽⁴⁷⁾。

文学活動にとどまらない社会的活動の広がり

『灯泥』『摸』『石器』に集った詩運動の担い手たちの主要な幾人かは、単に文学の領域にとどまらず、自治会や後の国家賠償請求訴訟(国賠訴訟)のリーダーとして、その活動は社会的広がりを持ち、ハンセン病問題の解決にも寄与した。

厚木叡(光岡良二)や盾木汎は、共に文芸活動のほか、多磨全生園の自治会活動、全国ハンセン病患者協議会(全患協)で活動した。

中石としおは、大島青松園の詩サークルで活動するかたわら、自治会長、全患協事務局長、『青松』編集長などを歴任した。

島比呂志は、星塚敬愛園で文芸同人誌『火山地帯』を主宰したほか、数多くの小説、評論でらい予防法体制を批判しつづけ、らい予防法廃止後も国は人権侵害の責任を認めていないと熊本地裁に国賠訴訟を提起する口火を切った。

衍雄二は、国賠訴訟を東京地裁に提起。ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会(全原協)の会長も務めた。

国本昭夫(国本衛)は、多磨全生園の自治会活動、在日韓国・朝鮮人ハンセン病患者同盟委員長、『多磨』誌編集長などを歴任。国賠訴訟では、全原協の事務局長を務めた。国本は当初、国賠訴訟の原告に加わることを躊躇していたが、『灯泥』時代の文学仲間である衍雄二から「東でも裁判を起こそう」と「何度も説得の電話がかか」り、その結果、原告に加わることを決意している⁽⁴⁸⁾。

本来であれば、一人ひとりの詩人に即して、詩を書くことがいかに状況への関与を促したのかという分析が必要であろうが、今後の課題とし、本稿では例示にとどめる⁽⁴⁹⁾。

(47) 『石器』以後の詩活動の特徴や主題の変化については別の機会に譲るが、長島愛生園の詩人・島田等らが結成した『らい詩人集団』によるサークル詩誌『らい』(創刊号1964年9月～第25号1980年2月)が重要である。『らい』は、『石器』終刊以後唯一、全国の療養所から詩人たちが参加するサークル誌となった。河田正志、衍雄二、北河内清、中石としお、福島まさみ(福寿美津男)ら同人は、『灯泥』『石器』に集ったメンバーと重なる。創刊号の「宣言」では、「私たちの詩がらいとの対決において不充分であり、無力でもあつたこと」を直視し、その克服のために、「自己につながる病根を摘発すること」が課題として掲げられた。「ポスト退潮期」の課題を見据えた詩活動を展開した。

(48) 国本衛『増補版・生きて、ふたたび 隔離55年—ハンセン病者半生の軌跡』(毎日新聞社、2001年) 272-273頁。

(49) 前掲、拙著『來者の群像』では、療養所の詩人たちが、これら自治会活動、国賠訴訟のほか、療養所内の在日朝鮮人の待遇改善、教養講座(栗生樂泉園)、盲人ハーモニカバンド青い鳥樂団(長島愛生園)、菊池事件への支援など、文学の領域にとどまらない広範な活動を担うに至った動機や過程を、一人ひとりの詩作品との関連で明らかにしているので参照されたい。

最後に、なぜ詩というジャンルから、これだけの人材が育ったのかに触れて本稿を閉じたい。戦後の文学活動は戦後民主主義と新薬プロミンの登場によって、精神的にも肉体的にも解放された上に展開されたという側面については先に触れた。1948～1949年にはプロミン獲得運動、1951年「全癪患協（全国国立癪療養所患者協議会）」結成（後の「全患協」、現「全療協」）。1952年～1953年「らい予防法闘争」が起り、本稿で扱った詩サークルの活動は、そうした患者運動の昂揚とも不可分である。

しかしここではそうした外的要因だけでなく、「詩を書く」ということそのもののうちに、社会的な視野を拡大する自己成長の鍵を見出だしてみたい。

参考となるのは、『猿』『灯泥』『石器』の詩人たちと親交を持ち、『いのちの芽』を編集した詩人・大江満雄による詩論である。大江は、栗生楽泉園の詩を通じて次のような言葉を残している。

「現代詩人は感傷性をきらうが、私は、感傷的にならざるをえない立場にある人に、感傷性をもつたということは、雨の中を傘をささずに歩む人に、雨に濡れるなというにひとしいと思う。しかし感傷におぼれるなということは必要だ。／感傷性には貴重な宝庫があり、泉があると、いうことを知り、それを発見する努力をしなければならないと思う。感傷は感情の傷みだから、それを自らが、いやし、自らが創造的な力に高めてゆくいうことが大切だと思う」⁽⁵⁰⁾。

「だれでもときには言葉が混乱して構成ができないときがあるが、このときほど大切なものが在る。大切なときである」⁽⁵¹⁾。

「エゴを死刑にしてやりたい」これは、なかな

かおもしろいが、[略] エゴというものは社会愛・人類愛と切り離すことはできないものだと思う。作者の自己にきびしい態度に好感もてるが、エゴを虐殺すると社会愛とか人類愛の生彩がなくなると思う。自我は人間の表現的実際活動によつて社会我世界我に成長するといいたい」⁽⁵²⁾。

ここで示唆されているのは、詩人としていたいどのような姿勢であろうか。戦前のハンセン病文学に見られたような、絶望・諦観に低回するのではなく、「感傷」そのものの中にも「創造的な力に高めてゆく」可能性を見るべきであること。「言葉が混乱」するときほど「大切」であり、その混乱に言葉を与えて自己の体験を「構成」し直してゆく契機とすべきであること。自らの内にある「エゴ」を消滅させるのではなく、自己と切り離さずに「表現的実際活動」を通して、「社会我・世界我」に成長させる展望を持つべきであること。

大江満雄は、このように療養所の詩人たちの自立の契機を見逃さずに、社会的な芽を伸ばしてゆくことを期待しつづけたのであった。

この後、1959年に出された栗生楽泉園の合同詩集『草津の柵』の序文で大江満雄は、「この詩集は、新しい精神潮流が古い救癪時代につちかわれた心理的土壤を、うちこわしているということを告げるだろう」と評して、療養所の詩人たちの人間性回復への変化を見逃さないでいる⁽⁵³⁾。

このような大江の指摘は、病苦と共に文芸活動を行なながら社会的な視野を獲得していった人々に共通することでもあり、詩というジャンルにのみ言えることではないかもしれない⁽⁵⁴⁾。実際、短歌の書き手が患者運動の担い手となった例がないわけではない。しかし俳句・短歌などの短詩形文学に比べて詩は、より制約の少ない表現形式であ

(50) 大江満雄「感傷性について」（『高原』第8巻第8号、1953年10月）10頁。

(51) 大江満雄「詩の表現性・伝達性」（『高原』第9巻第2号、1954年2月）11頁。

(52) 大江満雄「短評」（『高原』第10巻第1号、1955年1月）10-11頁。

(53) 大江満雄「序」（栗生楽泉園詩話会編『草津の柵』昭森社、1959年）6頁。

(54) 例えば、「陸の中の島—全国ハンセン氏病患者短歌集」（新興出版社、1956年）の書評で杉浦民平は、この歌集には「運動を素材として歌っている歌もいくつか目立つ」と指摘し、「今まで『天刑病』などというおそるべき差別をあきらめてうけいれていたひとびとが人間としての待遇を要求する運動が、ほとんどあらゆる療養所をまきこんだしたら、患者の中におさえつけられていた生命もゆりうごかされて燃え上がらずにはいられないはずだ。運動にじかにたずさわったひとびとはいうまでもないが、傍観していたひとびと、いな反対者すら人間的な何ものかをかきたてられずにはすまなかつたにちがいない」と指摘している。杉浦民平「『陸の中の島』」（『現代短歌茂吉文明以後』弘文堂、1959年）350頁（初出は『檜の影』1957年1月号）。短歌の書き手についても詩と同様に社会的関心への広がりを論じることは可能であるが、別の機会に譲る。

ること。小説や評論などの散文を書き上げるだけの体力（手指の後遺症）に比較的左右されずに表現が可能であり多様な人材が参加しやすいことなど、詩という表現ジャンルに集った人々の持つ独自性を、本稿では強調しておきたい。

おわりに

多磨全生園における戦後の詩の活動を、サークル詩誌『猿』『灯泥』『石器』を中心に見てきた。検討を通じて明らかになったことを以下の4点にまとめることができる。

①多磨全生園の戦後の詩運動は新旧世代に別れて新たな表現が目指され、互いを意識しながら切磋琢磨する関係を築いたこと。新旧世代には共通して、既存のハンセン病文学へのアンチテーゼ（絶望・諦観の克服）が課題として意識されていたこと。

②多磨全生園という一療養所の詩サークルが母体となって全国組織として発展し「国立療養所詩人連盟」結成に至り、そこでは新旧世代が再度合流して共に詩作をおこなったこと。サークルの全国組織化は、文芸の中では詩サークルのみが果たし得た事柄であること。

③「国立療養所詩人連盟」が依拠した詩誌『石器』を通じて詩運動の担い手が育ち、『石器』終刊以後、文学活動の「退潮期」と言われる時期以降も、全国各園での詩活動に継承されたこと。

④全国組織を通じたサークル活動は、詩人たちに社会的な視野の拡大を促し、単に文学の領域にとどまらず社会的運動へと広がり、自治会活動や後の国賠訴訟の担い手としてハンセン病問題の解決に寄与したこと。

現在、残されたサークル詩誌の分析を通じて、戦後のハンセン病文学の固有の意義を確かめることができるのである。

付録・『猿』『灯泥』『石器』内容一覧

雑誌名	号数	発行年月日	編集発行人	住所	発行所	筆者	作品名	ジャンル	備考
猿	第1号	1951. 3. 15	伊東秋雄	東京都北多摩郡東村山局区内南秋津一六一〇多磨全生園内	全生詩話会	厚木叡	出発	詩	
						厚木叡	時圭	詩	
						北川光一	夕暮に心が	詩	
						伊島三吉	古い詩情	詩	
						宇津木豊	きつね火	詩	
						盾木弘	小河内にて	詩	
						中秋賢治	夜	詩	
						伊東秋雄	雪の悲哀	詩	
						田所靖二	福寿草と桜草と	詩	
						芳賀令吉	季節風	詩	
						館祐子	柊	詩	
						石川清澄	素描	詩	
						阿部芳春	蛾	詩	
						氷上恵介	失意	詩	
						厚木叡	猿種族宣言	散文	
						伊東秋雄	黄色い手紙	散文	
						伊東秋雄	嘘	詩	
						中秋賢治	夕陽	詩	
						宇津木豊	猫	詩	
						氷上恵介	灰文字	詩	
						石川清澄	夜明け	詩	
						館祐子	雪の想ひ	詩	
						阿部芳春	芭蕉	詩	
						厚木叡	孔雀	詩	
						氷上恵介	猿同人素描	散文	
						厚木叡	編集後記		
							原稿募集		
猿	第2号	1951. 5. 15	伊東秋雄	東京都北多摩郡東村山局区内南秋津一六一〇多磨全生園内	全生詩話会	氷上恵介	(タイトルなし)	詩	
						伊東秋雄	崖	詩	
						北川光一	くらい歌	詩	
						氷上恵介	氷河期	詩	
						館祐子	憩ひ	詩	
						中秋賢治	たそがれ	詩	
						阿部芳春	池	詩	
						石川清澄	花のこころ	詩	
						深山裕子	あまだれ	詩	
						宇津木豊	ゴブランの池	詩	
						厚木叡	フラグメント	詩	
						梶澄夫	悪夢	詩	
						梶澄夫	箴言	詩	
						梶澄夫	童話	詩	
						保坂みちを	少年の日に	散文	
						伊東秋雄	続・黄色い手紙	散文	
						厚木叡	盲語り一前号作品評	散文	
						伊東秋雄	『猿』創刊号作品短評	散文	
						三好豊一郎	春箋抄	散文	『猿』創刊号への感想・書簡の紹介
						大江満雄	春箋抄	散文	『猿』創刊号への感想・書簡の紹介
						横皓志	春箋抄	散文	『猿』創刊号への感想・書簡の紹介
						湯口三郎	春箋抄	散文	『猿』創刊号への感想・書簡の紹介
						阿部芳春	暮色の中に佇って	詩	
						北川光一	涎の歌	詩	
						中秋賢治	雨	詩	
						石川清澄	春雨	詩	
						館祐子	若葉に詩う	詩	
						あつざとし	涙の章	詩	
						厚木叡	編集後記		

雑誌名	号数	発行年月日	編集発行人	住所	発行所	筆者	作品名	ジャンル	備考
					水上恵介	編集後記			
						原稿募集			
旗	第3号								厚木叢「多磨詩壇の戦後十年」(『多磨』第36巻第9号、1955年9月) 57頁には「三号まで出して廃刊になつた」とあるが、現物を確認できない。
灯泥	創刊号	1950. 12. 15	灯泥同人	東京都東村山町南秋津	灯泥会	白浜博史	表紙	絵	
						翁雄二	扉	散文/詩	
						右川斗思	出帆	散文	
						奥隆治	路ばた		欠落
						白浜博史	暮色	詩	
						船城稔美	女	詩	
						国本昭夫	瞳孔の恋人	詩	
						翁雄二	黒い星	詩	
						右川斗思	風	詩	
						国本昭夫	二十代の苦惱	散文	
						白浜博史	目覚め	散文	
						奥隆治	発足	散文	
						右川斗思	一本杖	詩	
						翁雄二	病犬	詩	
						船城稔美	可能と限界	詩	
						奥隆治	暗鬱	詩	
						白浜博史	無題	詩	
						右川斗思	山のあらし	詩	目次では「山の嵐」
						船城稔美	花の死	詩	
						国本昭夫	編集後記		
灯泥	第2号								欠号
灯泥	第3号								欠号
灯泥	第4号	1951. 2. 15	灯泥同人	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇	灯泥会	岩壁実	表紙	絵	表紙には「三月号」とあり
						右川斗思	扉	散文/詩	
						楨皓志	山ふぶく	詩	目次では「楨皓二」
						白浜博史	必然	詩	
						船城稔美	誰だろう	詩	
						奥隆治	聖堂の影	詩	
						翁雄二	退屈な血	詩	
						右川斗思	母子	詩	
						鹿島乃里	運命	詩	
						国本昭夫	波	詩	
						三田遼	風	散文	
						A・K	ピッキング・ローリング	散文	
						翁雄二	凱歌	詩	
						奥隆治	ノスタルジヤ	詩	目次では「奥隆二」
						奥隆治	孤鳥	詩	目次では「奥隆二」
						白浜博史	捏人形の歌	詩	「捏人形」に「つくね」とルビ
						船城稔美	・・・マニア	詩	
						高橋利根二	星光	詩	
						国本昭夫	修羅の夜	詩	
						国本昭夫	書評『善知鳥』	書評	楨皓志 詩集『善知鳥』吉井書房刊、定価二百五十円 「善知鳥」に「うとう」とルビ
						国本昭夫	編集後記		
灯泥	第5号	1951. 4. 15	灯泥同人	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇	灯泥会	岩壁実	表紙	絵	表紙には「第五集」とあり
						奥隆治	扉	詩	
						右川斗思	幻	詩	
						奥隆治	夕暮の花	詩	
						比良田信吉	一篇の詩	詩	
						翁雄二	蛇	詩	
						船城稔美	傷心	詩	
						白浜博史	無言歌	詩	
						鹿島乃里	蝶	詩	

雑誌名	号数	発行年月日	編集発行人	住所	発行所	筆者	作品名	ジャンル	備考
						国本昭夫	雪痛み	詩	
						三田遼	ピッティング・ローリング	散文	
						羽雄二	或る独語—詩と実存—	散文	
						奥隆治	傾斜	詩	
						羽雄二	血の祈り	詩	
						羽雄二	雪	詩	
						比良田信吉	獣	詩	
						比良田信吉	無題	詩	
						船城稔美	気流	詩	
						白浜博史	春の舞踏	詩	
						右川斗思	幼な児	詩	
						右川斗思	電車のなか	詩	
						右川斗思	編集後記		
							受贈誌		『詩民族』詩民族社
							同人募集		
灯泥	第6号	1951. 5. 15	灯泥同人	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇	灯泥会	竹花忍	表紙	絵	表紙には「第六集」とあり
						国本昭夫	扉	詩	
						奥隆治	像	詩	「像」に「すがた」とルビ
						羽雄二	惰性	詩	
						右川斗思	黄色い季節	詩	
						鹿島乃里	或るシルエット	詩	
						島根きよ志	夕暮	詩	
						飯田恒夫	沙漠の中を	詩	
						比良田信吉	蛾	詩	
						国本昭夫	昭夫の中で	詩	
						白浜博史	硝子窓の風景	詩	
						双葉少貳	洋書を通して見た人世詩	散文	
						国本昭夫	批判せよ	散文	目次には記載なし
						羽雄二	ピッティング・ローリング	散文	
						比良田信吉	詩作する態度	散文	
						国本昭夫	一枚の十円紙幣 —乾いた或る街にて—	詩	
						右川斗思	日常	詩	
						島根きよ志	アカシヤの花	詩	
						島根きよ志	虫	詩	
						羽雄二	澱みの底で	詩	
						国本昭夫	灯泥の人々 (1)	散文	右川斗思、船城稔美の紹介
						右川斗思	編集後記		
灯泥	第7号	1951. 6. 15	灯泥同人	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇	灯泥会	竹花忍	表紙		
						右川斗思	扉	詩	
						羽雄二	大地に寄す	詩	
						右川斗思	墓地	詩	
						比良田信吉	病床断片	詩	
						白浜博史	玩具	詩	
						関道雄	或る残光	詩	
						鹿島乃里	波紋	詩	
						国本昭夫	黎明	詩	
						比良田信吉	ピッティング・ローリング	散文	
						羽雄二	ありのまゝに一無と感覚に就いて—現象としての考察	散文	
							同人募集		
							寄贈誌		爐146、ブレイアド通信11、ブレイアド13, 16、デモン15、茫洋12, 13、詩民族21
						島根きよ志	鏡の底	詩	
						高橋利根二	萬年青	詩	
						国本昭夫	灯泥の人々 (2)	散文	白浜博史の紹介
						羽雄二	編集後記		
灯泥	第8号	1951. 7. 15	灯泥同人	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇	灯泥会	竹花忍	表紙		扉に「第八集」とあり

雑誌名	号数	発行年月日	編集発行人	住所	発行所	筆者	作品名	ジャンル	備考
					国本昭夫	扉 永劫	詩		
					国本昭夫	命の花	詩		
					奥隆治	風景 (ある街にて)	詩		
					比良田信吉	愚問	詩		
					関道雄	輪廻の影	詩		
					船城稔美	無精卵	詩		
					中石としお	死	詩	大島青松園から初の参加	
					鹿島乃里	灰土の中で	詩		
					羽雄二	軸	詩		
					比良田信吉	詩論以前の詩論	散文		
					田島康子	詩人えの期待	散文		
					右川斗思	詩誌展望	散文		
					船城稔美	ピッキング・ローリング	散文		
					国本昭夫	灯泥の人々 (3)	散文	奥隆治の紹介	
					比良田信吉	編集後記			
灯泥	第9号	1951. 9. 15	灯泥同人	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇	灯泥会	竹花忍	表紙		
					右川斗思	扉 灼熱	詩		
					国本昭夫	無明	詩		
					国本昭夫	薄明	詩		
					比良田信吉	或る追憶	詩		
					比良田信吉	訣別	詩		
					鹿島乃里	東京駅	詩		
					船城稔美	消えず	詩		
					中石としお	夜のいのり	詩	大島青松園	
					右川斗思	夏の日	詩		
					右川斗思	ピッキング・ローリング	散文		
					国本昭夫	盲点と焦点—田島康子君へ	散文		
					国本昭夫	灯泥の人々 (4)	散文	羽雄二の紹介	
					右川斗思	編集後記			
						寄贈深謝		錆8、ブレイアド17、去来7月号、炉147、詩民族22、だいある14、詩雑筆10、日本沙漠創刊号、MENU4、未来園8、茫洋6、白亜紀創刊号、ブレイアド18、零度6、未来園9、浜工詩人8、詩と詩人104、錆9	
						錆		広告	
						零度		広告	
						現代詩辞典		広告	
灯泥	第10号	1951. 12. 15	灯泥会同人	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇	灯泥会	竹花忍	表紙	表紙に「十二月號」とあり	
						扉		扉に「10」とあり。目次には「十六世紀に於ける詩の韻律によつてかゝれたラテン語の模様」とあり	
					右川斗思	少女の瞳	詩		
					右川斗思	錆色の日々	詩		
					船城稔美	棘のある風景	詩		
					船城稔美	海	詩		
					関道雄	不透明な窓硝子の中では	詩	目次では「不透明な硝子窓の中では」とあり	
					伊藤秋雄	独居	詩		
					島根きよ志	風	詩		
					飯田恒夫	少女と窓	詩		
					国本昭夫	戯画	詩	「カリカチュア」とルビ	
					鈴英一	病人	詩	駿河療養所から初の参加	
					志樹逸馬	鐘を搗く	詩	長島愛生園から初の参加	
					鹿島乃里	ひまわり	詩		
					鈴英一	たたきわれ	詩	目次では「たゝきわれ」	
					河田正志	なやんでる人よ	詩	長島愛生園から初の参加	
					恵美かおる	鎖—または癩の環	詩	大島青松園から初の参加	
					小島浩二	試運轉	詩	長島愛生園から初の参加	
					島内真砂美	コーヒーのユーモア	詩	大島青松園から初の参加	

雑誌名	号数	発行年月日	編集発行人	住所	発行所	筆者	作品名	ジャンル	備考
					中石としお	流星	詩	大島青松園	
					国本昭夫	一周年を迎へて	散文		
					奥隆治	編集後記			
						詩集 黒い帆		広告	
灯泥	第11号	1952. 4. 15	灯泥同人	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇	灯泥会	竹花忍	表紙		表紙に「N o. 11」とあり、扉に「11集」とあり
					国本昭夫	扉一合唱	詩		
					峰生のぼる	日曜日のために	詩		
					峰生のぼる	浪	詩		
					岬洸	不純なもの	詩		
					白浜博史	路傍のうた	詩		
					関道雄	手術	詩		
					中石としお	鈍痛	詩	大島青松園	
					奥二郎	雪野	詩		
					国本昭夫	火刑台	詩		
					国本昭夫	編集後記			
						寄贈深謝			日本沙漠2、詩人9、TAP7、爐148、海弔19、だいある15、変貌4、日本沙漠3、詩帖9、10、未来圏10、IOM33、詩民族24、火星人5、はなます67、斜線創刊号、茫洋15、爐149、VISION3、爐150、浪漫群盜、海弔20、未来圏11、おれの名は詩人、砂漠1月号、詩生活2
灯泥	第12号	1952. 7. 13	灯泥同人	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇	灯泥会	竹花忍	表紙		
					国本昭夫	扉一次元	詩		
					国本昭夫	詩人の倫理観（一） —破防法を粉碎せよ	散文		
					翁雄二	日本異邦のうた	詩		
					翁雄二	右か左か	詩		
					奥二郎	生存		目次に記載あるが本文に存在せず	
					岬洸	新しい歴史の誕生の日に	詩	目次は「新らしい歴史の誕生の日に」	
					岬洸	六月の気流のなかで	詩		
					右川斗思	風景	詩		
					鹿島乃里	雪の夜	詩		
					中秋賢治	真晝	詩		
					中秋賢治	夜	詩		
					国本昭夫	憂鬱の壁画	詩		
					H・T	二十世紀	散文		
					A・K	ピッティング・ローリング	散文		
					O・O	雨足の街	散文		
					国本昭夫	編集後記			
						会員募集			
						浪漫群盜叢書、季刊詩誌 浪漫群盜		広告	
灯泥	第13号	1952. 9. 30	灯泥同人	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇	灯泥会		表紙		表紙に「第十三輯」とあり。表紙の作者名記載なし。この号から表紙絵が変わる。
					国本昭夫	詩人の倫理観（二） —宗教を繰って	散文		
					厚木叡	Q廣場にて	詩	初参加	
					岬治夫	黄昏に唄ふ	詩		
					中石としお	綱	詩	大島青松園	
					峰島美雄	輝きゆく瞳	詩		
					右川斗思	煙突	詩		
					日向晋	野笛	詩		
					李粉南	祖国を愛する	詩	『新日本文学』十月号所載（広島県古市町、小学校六年生）	
						記録筆—詩誌「エオン」 発刊、詩集「八月十五日」			
					田幾元一郎	蒼い夜	創作	「連載第一回」とあり	
					国本昭夫	編集後記			

雑誌名	号数	発行年月日	編集発行人	住所	発行所	筆者	作品名	ジャンル	備考
灯泥	第14号	1952. 11. 25	灯泥同人	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇	灯泥会	竹花忍	表紙		表紙絵がまた元に戻る。表紙に「二周年記念號」とあり
						国本昭夫	扉	散文	
						田所靖二	葦笛	詩	初参加
						岬治夫	夜明けの讃歌	詩	「讃歌」に「うた」とルビ
						国光静志	祈り	詩	初参加。目次では「国満静志」
						塩ゆき子	碧色の想ひで	詩	初参加。
						石川清澄	無題	詩	初参加
						石川清澄	竹林によせて	詩	
						館祐子	花を	詩	初参加
						関道雄	立札—或る農民の叫び	詩	
						奥二郎	少女の祈り	詩	
						奥二郎	ろう獄の合唱	詩	
						国本昭夫	明日はどのような	詩	目次では「明日はどのやうな」
						岬治夫	蘇える暗黒時代に於ける現代詩人の斗争	散文	
						田幾元一郎	蒼い夜	創作	「連載第二回」とあり
						奥二郎	創刊當時	散文	
						国本昭夫	編集後記		
灯泥	第15号	1953. 2. 25	灯泥同人	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇	灯泥会		表紙		表紙に「第十五輯」とあり。作者名ないが、表紙絵また変わる。
						白浜浩	再度自由の旗は破れて	詩	
						白浜浩	砂漠	詩	
						中石としお	ことば	詩	大島青松園
						奥二郎	木立	詩	
						奥二郎	初冬	詩	
						岬治夫	冬	詩	
						岬治夫	自由の輝	詩	
						岬治夫	脳髄	詩	
						岬治夫	植民地	詩	
						塩ゆき子	黒色の幻想	詩	
						塩ゆき子	白いはなびら	詩	
						関道雄	黒い外套	詩	
						康一	愛する人々よ考えてくれ	詩	
						康一	桙の垣根	詩	
						国本昭夫	輪廻	詩	
						国本昭夫	炎える瞳	詩	
						国本昭夫	実在	詩	
						国本昭夫	掌中談話	詩	
石器	創刊号	1953. 10. 1	厚木叡	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇 多磨全生園内	国立療養所詩人連盟	厚木叡	創刊の言葉	散文	
						北原紀夫	呪詛の行列が還ってくる	詩	
						北原紀夫	夕やけ	詩	
						奥二郎	街	詩	
						白浜浩	手品師と群衆—またはCHRITIESTとレプラ患者	詩	
						中石としお	黒い胎動	詩	大島青松園
						北川光一	こどく	詩	
						北河内清	影の詩	詩	星塚敬愛園
						岬治夫	雨	詩	
						島比呂志	巷の表情	詩	星塚敬愛園
						松田一夫	生活一帰省ノートより	詩	星塚敬愛園
						船城稔美	パンパン、ニッポン	詩	
						堂崎しげる	雲と私と	詩	邑久光明園
						島内真砂美	ひそかな炎	詩	本文では「島田真砂美」、大島青松園
						山本巖	暗夜行路	詩	大島青松園
						多岐葉一	青と赤の偶像	詩	
						石川清澄	雲影	詩	
						河田正志	曇っている日	詩	長島愛生園
						冬敏之	夏	詩	
						恵美かおる	折鶴によせて	詩	大島青松園

雑誌名	号数	発行年月日	編集発行人	住所	発行所	筆者	作品名	ジャンル	備考
						上野青翠	雲の情態	詩	大島青松園
						佐々木寒月	病葉	詩	東北新生園
						山沢芳	春の陽	詩	本文では「山沢房」、大島青松園
						深山裕子	くりごと	詩	
						福寿美津男	彼の条件は僕を奪うことだった	詩	栗生楽泉園
						山口忠夫	美しき死の誘い	詩	大島青松園
						生多純	断章	詩	
						館祐子	夜の疲れ	詩	
						日々野遼	踊灯	詩	
							『石器』原稿募集		
						国本昭夫	記憶	師	
						志樹逸馬	或る日の幻想	詩	長島愛生園
						厚木叡	鷺毛	詩	
						盾木弘	心象雜記	散文詩	
						国本昭夫	編集後記		
							会員募集		
							神保光太郎『詩集・青の童話』		広告
							国療詩人連盟会員名簿		
							大江満雄編『いのちの芽』		広告
							南線工房(高知、孔版印刷)		広告
石器	第2号	1953.12.1	厚木叡	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇 多磨全生園内	国立療養所詩人連盟	白浜浩	表紙		印刷:南線工房(高知)
						厚木叡	女王戴冠	散文	
						北原紀夫	廃者の領域	詩	
						福寿美津男	風景	詩	栗生楽泉園
						中石としお	向日葵	詩	大島青松園
						秋田穂月	芙蓉	詩	邑久光明園、初参加
						白浜浩	空のない風景	詩	
						石川清澄	電柱	詩	
						伊野京作	ある日	詩	
						上野青翠	黒いレイ	詩	大島青松園
						奥二郎	孤独	詩	
						山沢芳	面舵一ぱい	詩	大島青松園、目次では「山沢房」
						松田一夫	日本の表情	詩	星塚敬愛園
						河田正志	はかない旅人です	詩	長島愛生園
						堂崎しげる	波動	詩	邑久光明園
						島内真砂美	療養日記	詩	大島青松園
						蘇鉄稔	画題	詩	星塚敬愛園、初参加
						島比呂志	署名運動一大野ガ原演習場設置反対	詩	星塚敬愛園
						上丸春生子	秋	詩	邑久光明園、初参加
						山口忠夫	砂漠の中で一仮面のヒューマニストへ	詩	大島青松園
						山本巖	歌	詩	大島青松園
						多岐葉一	影絵	詩	
						船城稔美	たそがれ	詩	
						国本昭夫	くら闇にうたう墮天使の歌	詩	
						厚木叡	高原にて	詩	
						志樹逸馬	鑿と琴	散文	
						国本昭夫	鑿と琴	散文	
						北原紀夫	編集後記		
						国本昭夫	編集後記		
							原稿募集		
							会員名簿		
							会員募集		
							南線工房(高知、孔版印刷)		広告
							大江満雄編『いのちの芽』		広告
							永瀬清子『女詩人の手帖』		広告

雑誌名	号数	発行年月日	編集発行人	住所	発行所	筆者	作品名	ジャンル	備考
石器	第3号	1954. 1. 1	厚木叡	東京都北多摩郡東村山町南秋津一六一〇 多磨全生園内	国立療養所詩人連盟	白浜浩	表紙		印刷：南線工房（高知）
						大江満雄	目に見えないコスモスの花についてーある老石頭の女に	詩	外部の一般詩人
						山本太郎	青蠅の唄	散文詩	外部の一般詩人
						奥二郎	墓地	詩	
						関道雄	反逆児	詩	
						福寿美津男	高原	詩	栗生楽泉園
						福寿美津男	病床にて	詩	栗生楽泉園
						志樹逸馬	いつも新しい生命の発見を	詩	長島愛生園
						秋田穂月	野に降る春の雨	詩	邑久光明園
						白浜浩	煙突	詩	
						冬敏之	過去	詩	
						よこやまひでを	煙ひとすじ	詩	栗生楽泉園、初参加。目次では「横山秀雄」、会員名簿では「横山石鳥」
						河田正志	目玉	詩	長島愛生園
						北原紀夫	病室	詩	
						中村七鶯	月光	詩	邑久光明園、初参加
						高橋晴緒	自画像へのサイン	詩	栗生楽泉園、初参加
						堂崎しげる	孤独者	詩	邑久光明園
						上丸春生子	此の山	詩	邑久光明園、目次では「この山」
						生多純	影の男	詩	本文では「生田純」
						恵美かおる	つきよたけ	詩	大島青松園
						館祐子	秋陽	詩	
						盾木弘	或る独白	散文	「鑿と琴」欄
						奥二郎	雑記帖	散文	「鑿と琴」欄
						厚木叡	若さについて	散文	「鑿と琴」欄
						島比呂志	鳩帰る	詩	星塚敬愛園
						北川光一	花と蝶	詩	
						田所靖二	影絵	詩	
						国本昭夫	夜の祈禱	詩	
						厚木叡	山	詩	
						志樹逸馬	編集後記		長島愛生園
						厚木叡	編集後記		
						国本昭夫	編集後記		
							会員募集		
							『石器』原稿募集		
							南線工房（高知、孔版印刷）		広告
							受贈誌		生活詩集、薔薇科、パンの樹、JAP、魚紋、黄薔薇、櫻
							大江満雄編『いのちの芽』		広告
石器	第4号	1954. 2. 15			国立療養所詩人連盟	白浜浩	表紙		表紙・目次のみ。本文欠落。
						志樹逸馬	土壤		長島愛生園
						石川清澄	夕陽		
						佐々木寒月	朝えの行進		東北新生園
						北川光一	影		
						北原紀夫	神話		
						松田一夫	ある風景の中で		星塚敬愛園
						島内真砂美	山上の朝		大島青松園
						奥二郎	デルタ地帯		
						島比呂志	日本の貞操		星塚敬愛園
						堂崎しげる	未知の方向え		邑久光明園
						上丸春生子	平和		邑久光明園
						山沢芳	マラソン		大島青松園
						上野青翠	沈んだ窓		大島青松園
						多岐葉一	冬陽		
						北河内清	日記		星塚敬愛園
						国本昭夫	妹に贈る詩		
						志樹逸馬	鑿と琴		長島愛生園

雑誌名	号数	発行年月日	編集発行人	住所	発行所	筆者	作品名	ジャンル	備考
						島比呂志	転換期の癡文学		星塚敬愛園
							編集後記		
							新会員紹介		
石器	第5号	1954. 6. 1	厚木叡	東京都北多摩郡東村山町南秋津 一六一〇 多磨全生園内	国立療養所 詩人連盟	白浜浩	表紙		
						厚木叡	理性の旗手	散文	
						佐々木寒月	婢裂れの詩	詩	東北新生園、「ヒビワ (れ)」と ルビ
						佐々木寒月	夜の檻	詩	東北新生園
						佐々木寒月	隙間なき空間	詩	東北新生園
						志樹逸馬	わたしの生命のために	詩	長島愛生園
						中石としお	砂	詩	大島青松園
						多岐葉一	目新しい風景	詩	
						島内真砂美	松の実落ちる日	詩	大島青松園
						高橋晴緒	来訪者	詩	栗生楽泉園
						北原紀夫	時計	詩	
						堂崎しげる	紙片	詩	邑久光明園
						河田正志	僕等は	詩	長島愛生園
						北河内清	失格者の詩	詩	星塚敬愛園
						勝賀瀬 美佐子	狂躁曲	詩	大島青松園
						秋田穂月	さゝやき	詩	邑久光明園
							受贈誌		パンの木、JAP、櫂、角笛、 黄薔薇、現代詩評論、内海詩人、 青松、武蔵野、群灯、風と光の象、 詩人種
						志樹逸馬	鑿と琴	散文	長島愛生園
						あつぎ さとし	鑿と琴	散文	
						島比呂志	力ニの泡——青年の便り を吉田首相来鹿のもよう を知る	詩	星塚敬愛園
						島比呂志	ポケットにかくすのはよ そう	詩	星塚敬愛園
						上丸春生子	よろこび	詩	邑久光明園
						石川清澄	どん声	詩	
						上野青翠	白亜の殿堂	詩	大島青松園
						山沢芳	二月の空	詩	大島青松園、目次では「二月の月」
						奥二郎	追憶	詩	
						厚木叡	祈る少女	詩	
							批評集		藤原定『歴程』、川崎洋『櫂』、 金井直『現代詩評論』、中村温『J AP』
						A	編集後記		
							『石器』原稿募集		
石器	第6号	1956. 3. 10	厚木叡	東京都北多摩郡東村山町南秋津 一六一〇 多磨全生園内	国立療養所 詩人連盟	J・P・ サルトル	扉	散文	
						田所靖二	風景	詩	
						堂崎しげる	椅子	詩	邑久光明園
						関道雄	LEPRA SANAT ORIUM	詩	目次では「Lepra San atorium」
						境登志朗	新生	詩	長島愛生園、初参加
						北原紀夫	十一月七日	詩	
						河田正志	そのときは来ている	詩	長島愛生園
						奥二郎	晚秋	詩	
						勝賀瀬美生 子	紅	詩	大島青松園
						上丸春生子	夜明けの漁村	詩	邑久光明園
						多岐葉一	蛾	詩	
						島内真砂美	小島の文化	詩	大島青松園
						佐々木寒月	皿の眼	詩	東北新生園
						国本昭夫	蒼白い合唱	散文	2頁以降欠落
						厚木叡	魚紋アンソロジイを読ん で	散文	欠落
						A	後記		